

風蓮湖の印象

西田 信隆



42年度調査班夏合宿は、北海道東端の根釧原野がオホーツク海に終わる接点に位置する風蓮湖で行われたが、湖岸に立ってこの湖を眺めると驚くばかりに広いということに気づく。面積52 Km²日本では14番目にあたり数字的に見ればさほど大きくはない。どうしてこのように広く大きく感じられるのだろう。これはこの地理的位置が原因していると思う。すなわち、前にも述べたよ

うに、どこまでも平面が広がる根釧原野にあってしかもオホーツク海に接する所であるので、山らしきものは何一つなく、何もかもが平面的なのである。だから、どれが水面なのか対岸の地面なのか、判然としない。そのために無限の広がりを持つかのような錯覚にとらわれるのである。

我々は別海村、この村は香川県と同じ位の広さを持つ村であるが、この別海の走古円という所を

基地として、湖上と地上とを有機的に利用して活動を行なったわけであるが、この走古円という所へ行くには、標津線の西別駅でおりてバスに乗る。このバスは1日に2往復しかない。ここの部落は漁業で立地しているのであるが、すべての家は立派であり本州におけるような漁村という感からはほど遠い。豊かなのである。走古円の学校の先生が嘆いていた。ここでは私が最低の給料を取っているのではないかと。

我々がそこに着いた時は、ホタテ貝漁の真最中この漁は7月の初旬から8月の中旬までで、主に香港へ輸出されるらしい。朝早く船に乗り込み、風蓮湖よりオホーツク海に出て漁がなされる。夕方に帰ってくると、水あげ量を計っている威勢のいい声がよく聞かれたものだった。このホタテ漁の他に時期は少々早かったが、サケ、マスの養殖が風蓮湖に注ぐ二大河川、風蓮川、ボンシュベツ川において行なわれている。我々もこれら河川をボートで航行の時大きなマス1匹分けてもらい、夜、ホタテ貝のサシミ等と共に舌鼓みを打ったものだった。

我々はこの湖に広がる湿地帯を対象として調査を進めたわけであるが、この湿地帯は汽車の中からは、風蓮川の上を渡る時に一部見られるだけで

あって、この他は、ブッシュをかきわけて行かないと湿地帯に出ることはできない。すなわち、ブッシュとの戦いが終われば、次に待っているのが泥との戦いであってこの調査行はかなりの体力が必要とされたわけである。しかし我々は部分的に広がる湿地帯をもかなりトレース出来た。又我々はボートを使って河川を下り、アブに刺されながらも調査を進めた。さらに印象的だったのは、ボートに穴があいてしまい、待合せ場所へ約束の時間に間に合せるため一生懸命泳いだことであった。

この湖は最深部で11mであり、ウェットスーツとシュノーケルで素もぐりを行ない、満足ではないが湖底調査も行なった。

このように今回の合宿において我々は、ゴムボート・アクアラング等を使用し、又非常な体力の消費、又植物部門、湿地帯における水質の検査や湖底の泥の粒度分析等自然科学分野にも意欲をわかしたということは、今後の活動に一つの方向を示したといえる。

最後に余談になるが、オホーツク海で泳いだ時の水の冷たさ、オホーツク海の青さと砂浜に咲くハマナスの赤い花を忘れることはできない。

にしだ・のぶたか(経済学部学生)